

氏 名	渡邊 大樹		
授与した学位	博 士		
専攻分野の名称	学 術		
学位授与番号	博甲第	6 9 3 6	号
学位授与の日付	2 0 2 3 年 9 月 2 5 日		
学位授与の要件	環境生命科学研究科 環境科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)		
学位論文の題目	権威主義的環境主義下におけるガバナンスの構造 ーベトナム南部のマングローブ・エビ養殖地域を事例にー		
論文審査委員	教授 生方 史数	教授 キム ドウチュル	准教授 本田 恭子
学位論文内容の要旨			
近年の社会主義国による環境分野での躍進に伴い、権威主義的環境主義（AE）が脚光を浴びている。集権的な公共政策モデルとして定義される AE は、これまで環境ガバナンス論で説かれてきた民主主義的なプロセスとは相反し、民主主義と環境問題の親和性に疑問が投げかけられている。一方で、AE に関しては、ローカルな統治行為に権威主義でも民主主義でもない多義性が確認されており、その統治の実態には未だ不明な点が多い。そこで、本研究ではベトナム南部のマングローブ・エビ養殖地域における現地調査から、環境ガバナンスを構成する主体間での相互作用を検討し、AE 下におけるガバナンスの構造を理解するうえで、国家と地域社会の視点から多義性が生じる理由とそれが何をもたらしたのかを考察した。 第1章では、背景、文献レビューを記述し、第2章では、概念整理をし、研究目的・研究方法を説明した。 第3章では、AE の発展プロセスを理解するために先行研究のレビューを行い、ベトナムの環境国家の形成過程を検討した。その結果、国家が国際援助に依存しながらグローバルな枠組みや制度を利用・加工してきたことが明らかになった。しかし、政府は環境ガバナンスで覇権的な立場に君臨したが、必ずしも統治力を十分に発揮できたわけではなかった。それには環境と開発をめぐる国家内部の利害対立が関係していた。 第4章及び第5章は、AE の発展プロセスをローカルな統治の実践の場から見たものである。まず第4章では、現場の森林官と現地住民のエビ養殖者との資源利用をめぐる相互作用を時系列で検討した。その結果、かつてフロンティアであったマングローブ地域は、国際援助の下で統治権力を養ってきた国家に包囲されたことが分かった。一方で、現場では土地利用の制度と実態との間に乖離が生じていた。それには、森林官による住民の土地利用の恣意的な目溢し、住民の交渉、国家と社会の偶然の利害の一致が関係していた。 次に第5章では、グローバル市場に基づく統治として位置づけられる国際資源管理認証が、地域社会をどのように変えるのかを検討した。その結果、調査地では国際的な制度が地域を変えるのではなく、むしろ制度の導入の成否を地域が規定していたことが明らかになった。このようなグローバルな統治に対する地域社会の頑健性は、マングローブ生態系に依拠した独特な粗放的養殖と慣習経済に起因していた。 第6章及び第7章では、第5章までの分析結果から、ベトナムの AE が単なる権威主義的なものではなく、多義性を有するものであることを指摘しつつ、AE 下におけるガバナンスの構造を、グローバル・アクターによる影響、環境統治に見られる国家の性質、マングローブ・エビ養殖地域という「場」の観点から検討した。そして、上記の要因が、国家と社会に一時的な社会政治的均衡をもたらしたことを明らかにした。ただし、上記の均衡は一時的で偶然の産物であるため、そのダイナミクスを追跡する研究が今後必要である。			

論文審査結果の要旨

近年の一部の社会主義国による環境対策の著しい成果は、環境ガバナンス論の前提であった民主主義との親和性に疑問を投げかけている。しかし、これらの国で権威主義的な環境管理の政策モデル（権威主義的環境主義：AE）がどう機能するのかは不明な点が多い。本論文は、ベトナム南部のマングローブ地域を事例に、ガバナンスを構成する主体であるアクター間での相互作用を分析することで、AEに基づくガバナンスの構造を検討している。

本論文が明らかにした点は、以下4点に集約できる。第1は、国際援助に依存しつつ、グローバルな統治技術を国内の政治的文脈に沿うように利用・加工することで、ベトナム政府が独自のAEを築いてきたことである（第3章）。第2は、マングローブ地域が国家によって囲い込まれる過程で、現地の森林官とエビ養殖者である住民との間で多様かつインフォーマルな交渉が行われ、それが地域社会の安定と一定の環境成果をもたらしたことである（第4章）。第3は、現地で政府やグローバル・アクターによって導入された国際資源管理認証が、地域の生産や流通を変えるのではなく、逆に地域社会が制度導入の成否を規定していたことである（第5章）。そして第4は、AEに基づくガバナンスの構造が、単純な権威主義的統治に留まらずもっと多様であったことを指摘しつつ、その理由と統治の長短を、グローバル・アクターによる影響、国家と社会の関係性、マングローブ地域という「場」の観点から説明した点である（第6章と第7章）。

本論文の学術的貢献は、いまだ不明な点が多いAEの構造・機能と問題点を、ベトナムの一地域の事例から詳細に明らかにしたことにある。文献資料の分析によるマクロな知見と、ローカルな統治実践のメカニズムに関する現地調査との融合が、それを可能にした。これによって、Q1ジャーナルに掲載されるような質の高い成果が得られており、地域研究および環境政治学・政策学的な研究として高く評価できる。